

パラリンピック最前線

アダプテッド・スポーツ (adapted sports) とは：
パラリンピック，そしてその先にあるもの岩岡 研典^{1,2)}

キーワード | adapted physical activity, 合理的配慮, インクルージョン

抄録

国際的に adapted physical activity (APA) と称される研究分野から生まれた造語であるアダプテッド・スポーツの意味とアプローチの独自性、その将来的な方向性について概説した。なぜ、アダプトするかに関しては、特別支援教育でよく用いられる“合理的配慮”の概念を援用し公正さ (equity) を実現するという考え方で、一定の合理的配慮を行った上でさらに平等性 (equality) を担保するためのレギュレーションに則って競技を行うパラリンピック種目との異同について論じた。アダプトすることによって、身体的差違の大きな者同士がともに身体活動を楽しむ公正な状況・環境が実現し、広く体験されることを通してインクルーシブな市民社会の形成へつながる可能性を強く願うものである。

1. はじめに

それは2月の雪の日のことだった。いままでに見たこともないほどたくさんの電動車いすや車いすが駒沢体育館のフロアを動き回り、会場には熱気と歓声が渦巻いていた。身体活動やチーム・ゲームが難しい (と想われている) 障がいの種類も程度も異なる選手たちが2チームに分かれてボールを奪い合い、各自の独自のやり方でシュートを試みる。それぞれの選手の状態に合わせたプレイの方法が組み合わされて全体のルールが創られていることは初めてでも把握できたし、とても工夫されたシュート方法を見つめる会場の視線は敵味方にかかわらず愛情に満ちあふれていて、気持ちがとても温かくなったことを思い出す (図1)。

このアダプテッドの極致ともいえる「ハンドサッカー」という競技は、本号のテーマであるパラリンピックの種目では、もちろん、ない。が、両者には“できない”と想われていた状態・状況を“できる”に工夫して変えていく考え方が通奏低音として流れている。そこで本稿では、アダプテッド・スポーツとパラリンピック種目との関連性や異同と将来的な方向性などについて簡潔な紹介を試みたいと思う。

2. アダプテッド・スポーツとは何か

先に紹介したハンドサッカーのように、障がいや高齢な



図1 ハンドサッカーのシュート例

口元のスイッチにより後ろのクルマが電動車いすを押し、足で(が)ボールを蹴るこの選手独自のシュート方法 (日本ハンドサッカー協会¹⁾「ハンドサッカーを知っていますか」より)

どにより、なんらかの活動が制限されたり参加が制約されて身体活動やスポーツを楽しむことが“できない”状態・状況を、必要であればルールや用具・装置を工夫したり新たに開発することによって“できる”ように創り変え、誰もが

Adapted sports, its implications for Paralympics and future perspective toward inclusive society

1) 金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科特別支援教育教員養成課程 〒920-8620 金沢市御所町丑10-1

Adapted Physical Activity Unit, Department of Sports Science, Faculty of Human Sciences, Kanazawa Seiryō University

10-1 Ushi, Goshō-machi, Kanazawa-shi, Ishikawa, 920-8620 Japan

Kensuke IWAOKA (研究職)

2) 日本アダプテッド体育・スポーツ学会 2013-2014 期, 2015-2016 期会長

Kensuke IWAOKA (研究職)

身体活動を楽しめるよう保障していく考え方を「アダプテッド・スポーツ」というようになってきている。

筆者は数年前に「ランチャレ」(ランニング・チャレンジ)²⁾というイベントを見学したことがあるが、そこでは各個人に適合した(アダプトされた)義足を装着した参加者がとても嬉しそうにグラウンドを走っていた。義肢装具を用いることによって、それまでの“できない”を“できる”に鮮やかに変えていく、アダプテッドの考え方がそこに具現化されていて感銘を覚えたものである。また、特別支援学校などの教育現場において、適切な義肢装具の開発とその利用によって子どもたちの身体活動の可能性が大きく拡張され実現している事例は枚挙に暇がない。アダプテッド・スポーツの領域に関わる一人として、この場を借りて、義肢装具の開発と実践利用に関わる方々に感謝申し上げたい。

さて、アダプテッド・スポーツは国際的によく言及される adapted physical activity (APA) という用語に由来する和製英語である。その誕生の経緯については、日本にこの概念を導入した矢部ほか³⁻⁷⁾を参照されたい。紙幅の関係上議論は避けるが、筆者としては字義通りこの考え方の根幹をなすアダプテッド (adapted) という用語が採用されていることに深い意味があると考えている。

APA とは何かについては、スポーツ科学に関する世界で最も大きな団体である国際スポーツ科学・体育協議会 (ICSSPE) が刊行している Directory of Sport Science (第6版)⁸⁾での区分と定義がわかりやすいので以下に紹介する。

それによると、スポーツ科学は主に単一の親学問を背景とする基礎的な8領域と、臨牀的に複数の親学問を統合したアプローチを採る応用的な10領域とに大別される。第5版においてはこのような二分はなされておらず、APAを含む20の研究領域が挙げられていただけなので、両者は相対立するものではなく、スポーツ科学の研究や実践の進展・分化にともなって新たに考えられた相互補完的な関係性をもった構成としてとらえられるべきであろう。

今回、APAは後者に分類され、“一般的なスポーツ科学によってこれまであまり取り扱われてこず、そのため利用できるリソースが限られていたり身体活動を均しく楽しむ機会と権利が欠けていたすべての年齢層のひとびとの身体活動に関する研究や理論と実践的な知見のことをいう。それらは個別の対象毎に実施されるプログラムにも、障がいの有無や年齢、性別、技術レベルの差などにかかわらず誰もが一緒に活動するなかで個別の課題に応じていく (inclusive) プログラムにも関係している”と記されている。あまりにざっくりとした定義ではあるが、実体をよく表しているのも事実である。

換言すると、いままで顧慮されてこなかったがために身体活動・スポーツの価値や機能を楽しむ“できない”状態・状況に置かれているひとたち(障がいのあるひとびとや高齢者、運動が苦手な子どもたちなど)にどうすれば“できる”

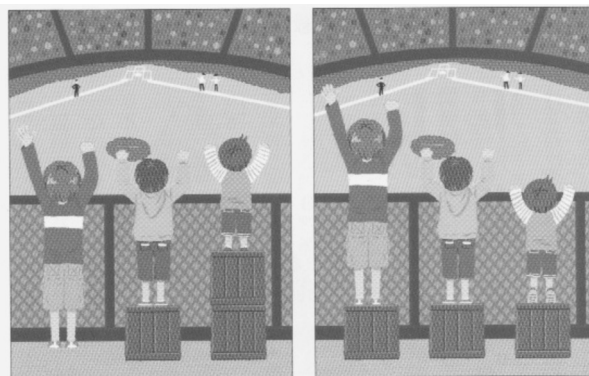


図2 “公正 (equity)” と “平等 (equality)” のイメージ⁹⁾より

よう保障するか、ともに活動を行いながら個々のニーズにいかに対応していくかを中心的課題として必要な方法論やアプローチを統合していく、きわめて応用の研究教育分野であり実践の現場であると考えられている。

3. アダプテッド・スポーツと現行のパラリンピック種目の考え方は同じか

図2は特別支援教育の場面でよく用いられる「合理的配慮」という概念によって“公正 (equity)” (左) と “平等 (equality)” (右) の違いを表したものである⁹⁾。アダプテッドとは、同じ光景を観る(同じ身体活動を行う)ために各自が必要とするステップ(合理的配慮、工夫)を用意することにほかならない。それによって身長異なる3人に均等な高さ(機会)が保障され、公正が実現する。このとき3人は同じ活動を各自で、あるいは一緒に行うことが可能になる。

それに対して、現行のパラリンピックやオリンピックの競技種目は、合理的な配慮をある程度行った(アダプトした)上で、ステップが2個必要な選手と1個必要な選手、ステップを必要としない選手が、原則的にはそれぞれのクラス内で競技成績を競い合うというイメージでとらえることができるだろう(クラスを超えて競技する可能性を否定するわけではない)。

したがって、後者では義足の走り幅跳び世界チャンピオンである M. レーム¹⁰⁾が義足を装着しない選手のクラスで競技することに現時点では議論が生じることになるし、ステップがいくつ必要かの判断を行うための評価とクラス分けの過程が必要となる。

さらに、世界最大の自転車レースであるツール・ド・フランスが2016年の大会から機材ドーピングの検査を実施している¹¹⁾ように、機材を用いる競技種目においては、ある一定のレギュレーションの範囲内にあるかどうかによって、“平等”が担保されていることが求められる。2001年に提携された国際オリンピック委員会 (IOC) と国際パラリンピック委員会 (IPC) の協力関係が2020年まで延長される¹²⁾ことから明らかなように、パラリンピックの競技種目は、クラスをいくつか統合する傾向はあるものの、基本

的にはクラス（ステップ）ごとに障がいのある選手が競技的卓越性を競い合う最高の競技会を堅持する状況にあり、クラス分けとレギュレーションに関する議論が必然的に生じるものと思われる。

このように、アダプトするということと、アダプトした上でパラリンピックで競い合うことそしてそのためのレギュレーションとは、次元の異なる議論である。ヒトの身体の遺伝的素因を同一にすることができない（多分）のと同様に、クラス分けと機材・用具に厳密な“平等”を担保することは非常に困難な事案であるように思われる（M. レームの場合は、義足が“競技上のアドバンテージ”を有していないことの証明がさらに求められた）が、M. レームが（以前にO. ビストリウスも）投じた一石によっていくつかの科学的な検証がなされ、ヒトの運動の仕組みに新しい知見が得られたことは確かだし、リオ後にM. レームも当事者としてワーキンググループに参加し、さらに検討が進められる¹³⁾ようになったことは記しておくべき進展であろう。文字通り、その着地点はどう見いだされ得るのか、非常に興味深いところである。

4. アダプテッドの先にあるもの

なぜ、アダプトするのか。それはなんらかの原因で身体活動やスポーツが“できない”状態・状況を“できる”に創り変え、誰もが楽しめるよう保障したいということが一義的理由である。アダプトすることに関して、前項で少し触れたように、レギュレーション（というある種の限定条件）内での洗練・深化を企図することも、クラスを超えて個人間であるいは集団で同じ身体活動を楽しむためにさらに身体を拡張・拡大する試みも、どちらの方向性も可能である。

前者のある意味、ストイックな取り組みに関しては本号の以後の特集ページにおいて詳述されるので、そちらを参照されたい。

後者に関連して、最先端のアシティブ・テクノロジーを駆使して身体障がいのある選手が強化された義手や義足で課題に挑戦したり、あるいは機能的電気刺激（FES）を用いて脊髄損傷の選手が自転車駆動するなど6つの種目で競われる「サイバスロン（cybathlon）」¹⁴⁾や、“すべての参加者がスポーツを楽しめる・技術とともに進化し続けるスポーツ・すべての観戦者がスポーツを楽しめる”の3原則にしたがって身体の拡張や道具の拡張などスポーツそのものの環境を拡張しようとする「超人スポーツ」¹⁵⁾など、これまでの既成の概念を超えたヴィジョンと試みが提案されるようになってきていてとても興味深い。

例えば、「超人スポーツ」では“年齢や障害などの身体差により生じる「人と人のバリアを超える」”ことを謳っているが、適切な合理的配慮を行うことによって同じ身体活動を一緒に行う、バリアのない公正な状況では何が生まれ得るのだろうか。

リオ・パラリンピックの自転車競技に出場する藤田征樹選手（2015年度パラサイクリングのロード世界チャンピオ

ン）は、効率よく力を伝えるための形状や素材に試行錯誤を重ねた義足を装着して障がいのない選手と当たり前のように同走しており、“障害の有無は関係なく…見ている人に何かを伝えられる人間でありたい…僕がそういう存在になることでパラサイクリングが特別なものでなくなる…”と語っている¹⁶⁾。

また、冒頭で触れたハンドサッカーでは、障がいの種類や程度の異なる1チーム7名のメンバーが相手チームとボールを奪い合い、直接ゴールを狙う以外に、シュートの権利を得ると、手が使えない場合は手で、脚/足の場合は脚/足で、装置や機器が必要な場合はそれらを用い、また新たに開発して、成功確率がおおよそ50%のシュート課題を各自が設定・申告しトライする（とても教育的である）。各選手の“できない”にではなく、“できる”に着目し、さらに各自の“できる”と“できる”を組み合わせて重度の障がいのある選手たちによるチームゲームを創り上げた、究極のアダプテッドともいえるアイデアがそこにはある。

どちらの事例でも、各選手に対する合理的配慮、工夫を組み合わせる（アダプトする）ことによって選手が一緒に活動を行うことが可能になり、そのなかでそれぞれの課題の達成に向けて連携しながら競い合うというインクルーシブ（inclusive）な身体活動が、特に意識することなく実現していると考えられないだろうか。そこでは心理的なバリアも限りなく小さくなり、図2で彼らの前にある壁そのものがなくなっているというイメージである。

アダプトすることによって公正な身体活動の楽しさを体験するとことさら意図的なアダプトの必要がなくなる…アダプトの先にはそういうインクルーシブな空間が形成されていく可能性があるかと筆者は考えている。

その著『目の見えない人は世界をどう見ているのか』で新しい身体論を展開した伊藤¹⁷⁾の表現を借りれば、いずれの方向への将来的な展開が試みられるとしても、そこには共通して“多様な身体を記述し、そこに生じる問題に寄り添う。そうした視点が求められている”のであり、アダプテッド・スポーツが採っているこのようなアプローチは実践現場でさまざまな事例に対応されている義肢装具の研究領域の方々と共有しやすいであろう。

アダプトすることによって身体が拡張され、ひとりでも多くの人々が身体活動やスポーツを楽しめる環境がさらに整備・充足されていくことを、そして拡張の先にはひとの身体活動とは何かなどまた新たな問いが生まれるかもしれないが、いまはともに行う活動のなかでより高い次元でインクルーシブな空間と好ましい市民社会が形作られていくことを願うものである。

文 献

- 1) 日本ハンドサッカー協会：URL：<http://handsoccer.jimdo.com/>
- 2) ランチャレ：URL：<https://www.p-supply.co.jp/seminars/98>
- 3) 矢部京之助ほか：アダプテッド・スポーツ（障害者ス

- ポーツ学) の提言～水とリズムのアクアミクス紹介～.
女子体育, 36 (11) : 20-25, 1994
- 4) 矢部京之助：長野パラリンピックにおける科学研究と
国際会議～アダプテッド・スポーツ科学の芽生え～. バ
イオメカニクス研究, 2 : 297-302, 1998
- 5) 矢部京之助：アダプテッド・スポーツとパラリンピッ
ク. 学術の動向, 11 : 54-57, 2006
- 6) 矢部京之助ほか：アダプテッド・スポーツについて.
月刊保団連, 9月号 (No. 1135) : 36-42, 2013
- 7) 荒木雅信：アダプテッド・スポーツの由来. No Limit,
65 : 19, 2016
- 8) Sherrill, C., et al. : Adapted Physical Activity Science.
Haag, H., et al. (eds.) ICSSPE Directory of Sport Science,
6th Ed., 123-132, Human Kinetics, 2013 (同書の電子版
(e-book)はICSSPEのサイトから購入可能. URL : <http://www.icsspe.org/>)
- 9) 河野俊寛：学習困難にどう対応すればよいか. 月刊実
践障害児教育, 4月号 : 2-5, 2016
- 10) Markus Rehm のホームページ. URL : <http://www.markus-rehm-88.de/>
- 11) UCI 国際自転車競技連合のプレスリリース. URL :
<http://www.uci.ch/pressreleases/uci-update-technological-fraud/>
- 12) 国際オリンピック委員会 IOC のニュース. URL : <https://www.olympic.org/news/ioc-and-ipc-sign-agreement-extension-until-2020>
- 13) 国際陸上競技連盟 IAAF のニュース. URL : <http://www.iaaf.org/news/press-release/gracia-rehm>
- 14) チューリッヒ工科大学サイバスのホームページ.
URL : <http://www.cybathlon.ethz.ch/en/>
- 15) 超人スポーツ協会のホームページ. URL : <http://superhuman-sports.org/>
- 16) Cyclist 藤田征樹選手の記事. URL : <http://cyclist.sanspo.com/260884>
- 17) 伊藤亜紗：目の見えない人は世界をどう見ているのか
(光文社新書 751). p. 151, 光文社, 2016
- ※各 URL に関しては, 2016年7月1日現在.